

平成27年度 日立市教育研究会先進校等調査派遣研修報告書

日立市立泉丘中学校 教諭 浅井 香

- 1 派遣期日 平成27年10月16日(金)
- 2 派遣先 学校名 横浜国立大学教育人間科学部附属鎌倉中学校
所在地 〒248-0005 神奈川県鎌倉市雪ノ下3-5-10
<http://www.kamajhs.ynu.ac.jp/>

3 研修内容

全体研究主題 「育成したい資質・能力をふまえた授業づくりと評価」

《教科(美術)で取り組む重点》

生徒が「やりたい！」を見つけ、それを実現するために
思考・判断しながら表現に結び付けることのできる力の育成

(1) 教科別事前協議会

① これまでの取り組みについて

- 学習指導要領の目標を達成するために、指導事項をどのように指導するのか、題材の設定と授業の展開を工夫した。
- 「発想や構想の能力」と「鑑賞の能力」の関連に重点を置き、授業改善を行った。
 - ・題材ごとに相互鑑賞の時間を設定した。
 - ・生活の中にある美を探し記録する活動を設定した。
 - ・年間指導計画において「A表現」と「B鑑賞」が関連するよう題材を設定した。
- 年間指導計画設定の工夫
 - ・領域、指導内容をバランスよく設定した。
 - ・3年間を通して、それぞれの能力が積み上げられるように題材を設定した。
 - ・「A表現」と「B鑑賞」が交互になるように設定した。

② 授業参観の視点について

- 題材名「誰でも見たらすぐわかる！ジュースのパッケージ」
 - ・授業改善の経緯
- 参観の視点(事後協議の柱)
 - ・生徒が自ら問題をとらえ、自分なりに解決しようとする力を発揮しているか。
 - ・生徒が「やりたい！」を見つけ、それを実現するために、思考・判断しながら表現に結び付けることのできる力を育成するためにはどうしたらよいか。

(2) 公開授業

- 題材名 「誰でも見たらすぐわかる！ジュースのパッケージ」

○本時のめあて

- ・自分の表現意図にあった表現ができるように、形の性質や、紙粘土の使い方を工夫するなど、制作の見通しをもちながら工夫して表現する。

○「資質・能力」を育てるための本時の学習活動の工夫

- ・「問題を捉え、自分なりに解決しようとする力」を育てるために、【課題発見→制作を通じた思考・判断→今後の見通し】の3ステップで授業を展開する。

○学習課題

- 「自分の表現意図にあった作品になるよう、紙粘土の使い方を工夫して表現しよう。」

○展開

- ・アイディアスケッチを基に、「単純化・強調されたわかりやすい形」をどのように表現すればよいかを考え、本時の学習の見通しをもつ。



↑参考作品(上級生の作品)

- 課題を見つける、本時のめあてをもつ。
- ・これまで制作してきた自分の作品をよりよくするために、創意工夫しながら表現する。
- 実際にやってみる、よりよくするための手立てを考えながらやってみる。
- ・次時の見通し（制作計画）をノートに記入する。
- よりよい解決を目指す。



↑ 授業の様子

○留意点

- ・評価計画において、本時の主たる評価の観点は「美術への関心・意欲・態度」と「創造的な技能」に関わることにしているが、制作状況によって「発想や構想の能力」に立ち戻り構想を練り直す生徒の姿も見られると考える。

(3) 研究協議会

① 生徒の問題解決能力の育成について

- 「美術の学習は、ひとつのゴールに生徒全員を同じように導いていくものではない。生徒一人一人が見つけた目標にたどり着けるように、一人一人の背中を押していくものである。」ということが大前提である。完成度の高い作品を「つくらせる」授業ではいけない。

- 授業の中で生徒が何回自己決定するかが大切である。今回の授業では生徒たちはお互いにアドバイスをし合い、よりよい作品にするための解決策を見つけ出していた。

② 生徒の「やりたい！」を実現するために

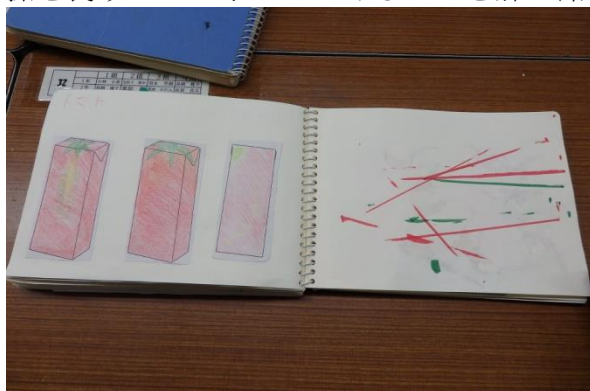
- 気付いたこと、気になることをメモしたり、必要な写真などをどんどん貼り付けたりできる「発想ノート」は、「やりたい！」の実現に有効である。

- 今回の題材では紙粘土を材料として使っていたが、紙粘土は加工の方法などが限られているため、生徒の表現方法も制限されてしまうのではないかと。立体にはせず、平面に模様を描く方法にしても、目標は達成できるのではないかと。

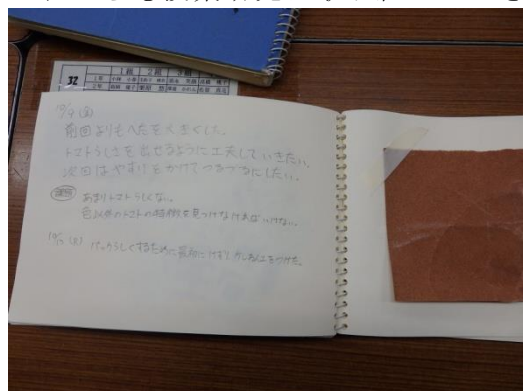
→生徒たちは紙粘土のほうが意欲的に活動する。大人から見ておもしろいと思うことと、子どもがおもしろいと感じることは違う。また、学校や学年によっての実態も違う。生徒の実態に合わせて授業計画を練らなければならない。

4 感想

協議会中のある先生の言葉で「美術教師は生徒に『いい作品を制作させたい』と思っている。しかし、それが『教師にとってのいい作品』になってしまってはいけない。」というものがあつた。生徒は自分が何を「やりたい！」と思っているのか、なかなか自分で気付けないことがある。その「やりたい！」を見つけられる手立てを講じ、スムーズに作品制作につなげられるようにすることが美術の授業研究である。しかし、分かっているにしても、市や県の展覧会のことを考え、「完成度の高い作品」「見栄えのする作品」を要求してしまいがちである。生徒がそれを望むのであればいいのだが、暗にひとつの方向に導いてしまわないようにしたいと、改めて思った。美術の最終目標は「豊かな情操を養う」ことである。発想の能力も、創造的な技能も、豊かな情操を養うための手立てであることを肝に銘じ、これからも授業研究に取り組んでいきたい。



↑ 「発想ノート」 アイディアスケッチ



↑ 「発想ノート」 反省と次時の見通し